

れに注意して頂きたい。(廻轉書栗の傍の安樂椅子に行き
断乎たる敵意を以て其れに身を沈める)

チャアテリス。(彼の反抗を、氣に仕過て従つて来る) どうも實
に驚いたねえ。バラモア。兎に角隠して居るね。僕
は君が何を初めたかすつかり知つて居るんだよ。全
く、君が申込を承諾されてにこにこして居ること、
思つてやつて來たのなもの。

バラモア。(腹立しく) そうだ。あなたは自分でミス、クレ
エヴンに氣があるから私を監視して居るのですね。
よろしい。行つて成功しておいでなさい。私が破産

したと聞いたらあなたは嘸喜ぶでせう。

チャアテリス。君が破産した。どうして。競馬かい。

バラモア。(嘲つて) 競馬。無論そうぢやない。

チャアテリス。バラモア。僕の財産を皆使つて窮境がどう
かなるなら、喜んで相談に應じやう。

バラモア。(驚いて立上る) チャアテリス。私は——(疑はし
げに) 戲談ですか。

チャアテリス。なせ君は何時でも僕が戲談を云つてるなん
て思ふんだい。僕は未會有の生眞面目だよ。

バラモア。(チャアテリスの太つ腹に恥ぢて) ぢやあ、どうも

失敬しました私はあなたが喜ぶこと、思つたんです。
 チヤアテリス。(好い感情を傷けられたのを深く憂ふる様子)ねえ

君——

バラモア。いや、どうも私が悪かつた。どうも済みませ
 ん。(握手する)ぢやあなたがあなたにも事實を話しませう。俱
 楽部のおしやべりから聞かれたよりも私から話した
 方が好い。私の肝臓の新発見がね——え、——(云ふ
 事が出来ない)

チヤアテリス。(助けるやうに)確證された。(洗んで)では可愛
 相に大佐は死刑に極まつた。

バラモア。いゝえ反對ですよ。え——怪しくなつたんで
 す。大佐は今ぢや全然健康だと自信して居る。私と
 クレエヴン一家との交際も變になつちまひました。

チヤアテリス。誰がクレエヴンに知らせた。

バラモア。勿論私ですよ。此の中の新事件を読んだ時に。

(新聞を示して、書架の上に置く)

チヤアテリス。どうしたんだ君。君が吉報を齎らしたんぢ
 やないか。祝つてはやらなかつたのかい。

バラモア。(侮辱されて)祝つてやる。三百年來嘗て病理學
 はこんなひどい打撃をうけたことはないのに、祝つ

てやる。

チャアテリス。いゝえ、いゝえ、決してそうおやないよ。

命が助かつたから祝つてやるのさ。父の命が助かつた事をジュリアに祝つてやるのさ。君の生涯の希望の集中されてゐる家庭に、その幸福が取返された。といふ愉快に較べれば、君の發見や名聲ぐらゐは何でも無いつて誓ふのさ。確かに君、かう云ふこまつかいとここで女の氣に入つて置かないと結婚は出来な

いものだよ。

バラモア。(沈着に)失敬だが、私にとつちや自尊心の方が

ミス、クレエヴァンよりは大事です。個人の利害を以て科學上の問題を汚す理には行かない。(冷淡に背を向けて卓子の方に行く)

チャアテリス。や、こいつは參つた。自由思想的の良心も實に好くないが科學的良心も災難だね。(バラモアに隣りて行き、親しげに肩の廻りに腕を置いてしゃべりながら連れ歸る) ねえ、バラモア。さういふ良心は僕には全くない。理想主義の良心は大嫌ひだ。しかしいくらかヒユマニチイと常識とはある。(バラモアを元の安樂椅子に掛けさせ自分も對坐する) 時に、科學的學説つて

のはどう云ふ物だい——眞の學説だらうね。

パラモア。無論。

チャアテリス。例へば君がクレエヴンの肝臓に就て學説を持つて居る。ねえ。

パラモア。今は覆されてゐるけれども、私は猶その眞實な事を信じてゐます。

チャアテリス。それから、ジュリアと結婚したら愉快に相違ないと云ふ學説をも持つてゐる。

パラモア。ある意味から云へば——まあそうですね。

チャアテリス。その學説も一年経つ内には覆へされる。

パラモア。しよつちう皮肉だ、あなたは。

チャアテリス。そんな事はまあどうでも好い。で君の肝臓學説が眞である事を望むのは、クレエヴンが悲惨な死を遂げる事を望むのと同様なのだから、君にとつては全く嫌なことだ。(パラモアはパラドックスだとは思ひながら、驚かされる)然しジュリアに關する學説の眞である事を望むのは彼女の永生を祈ることになるんだから、即ち愉快であり且人道的だ。

パラモア。私は心から——(云ひなほす)いや、私の力の及ぶかぎりそれを希望します。

チャアテリス。おやあ、兩方共同じやうに科學的學說であるのに、なせ人道的な人士として、嫌な學說よりも愉快な學說の證明に取り掛らうとしないんだ。

バラモア。だが、どう云ふ風にして。

チャアテリス。話して上げやう。僕は自分でもジュリアが好きだ。實際だよ。しかし僕は凡ての人が好きなんだから勘定に入らない。それにまた、科學的實驗としてあの女に、僕を愛してゐるかどうか尋ねて見給へ。きつと惡み卑しめて居るつて返事をするに相違ない。だから僕は問題外だ。それなのに僕は君と同じ

じくあの人の幸福を心——君は心からつて事を何と云ひ直したつけね。

バラモア。(辛抱しきれず) まあ、そんな事を云はないで、

さきをみんな話して下さいよ。

チャアテリス。(突然、全く冷淡な振をして、無頓着に立上る) もう話すことはありやしない。僕なら大佐が恐ろしい死刑を脱れたのを祝してクレエヴァン一家を招待するよ。序だが君が醫事新聞を讀んぢまつたのなら、君の學說がどんな風にやられたんだか一寸拜見したいね。

パラモア。(同じく立上りさまに身を退く) あ、お望みなら差支はありません。(書架から新聞を取る) 私はイタリアの實驗が明白に私の説を覆した事を認めますがね、でもどうか、動物實驗が信用するに足るかどうかは絶對に疑問だと思つて居て下さい。(チャアテリスに新聞を渡す)

チャアテリス。(受取りて) 僕は實驗をやるんぢやないのだからどうだつて好い。(イブセンの右のレセツスに退く。

通りすがりに踏臺の梯子を掴んで行く。腰掛に掛け、背を爐棚の角にもたせて體を落附け、梯子を足臺に使ふ。パラモア

食堂への戸口へ行き將に室を去らんとする時、グレエスの入り來るに逢ふ)

グレエス。おや、まあ、パラモア先生、今日は。(握手する)

パラモア。やあ、今日は。如何です。

グレエス。有り難う、お蔭様で。あなたは大變お疲れになつてゐらつしやる様ですわね。御用心あそばせな。

パラモア。どうも御親切様。

グレエス。あなたですよ、御親切なのは——患者にねえ。御自分を犠牲にしていらつしやるんですもの。少し

お休みなさると好いんですわ。わたしとお話しなさいませんか——新発見や、はやりの書物の事なんか。でもおいそがしいんでせうねえ。

バラモア。いゝえ、別に。至極結構です。(二人はイブセン

の左のレセツスに入り小聲にて密かに語り合ふ)

チャアテリス。醫者つて者はもてる者だ。醫者に向つては

好きな事が云るんだなあ。(ジュリアア歸り来る。チャアテ

リスは足を梯子より離して立上る)やあ。(ジュリアアは明かに

誰かを探がしながら彼の居る方の側を通つて行く、チャアテ

リスそつと従ふ)

チャアテリス。(低く)ジュリアア。僕を探して居るのかい。

ジュリアア。(仰々しく驚き)おや、吃驚したわ。

チャアテリス。しつ。好い物を見せて上げやう、御覽。(レ

ツセスの内二人を指さす)

ジュリアア。(嫉ましく)あの女。

チャアテリス。僕の女さ。あなたの男を横取りする所だ。

ジュリアア。何を云つてるの。ほのめかすにも——

チャアテリス。しつ。しつ。邪魔しちやいけない。(バラモ

ア立上つて書物を取り、グレースの足元の足壺に腰掛ける)

ジュリアア。何故あんなに小聲に話してるんでせう。

チャアテリス。話して居る事を他人に聞かせないためさ。

(パラモア書物中の畫をグレエスに見せ、兩人愉快げに笑ふ)

ジュリア。何を見させてるの。

チャアテリス。多分肝臓の畫だらう。(ジュリアは不快げに聲

を立て、レセツスの方に行かうとする。チャアテリス袖を捕

へる)お止しなさい。氣を附けなくつちや。(ジュリアは

男を突放す。男は安樂椅子に轉げ込む。ジュリアはレツセス

に行き爐に接した隅に立つて二人を見下す)

ジュリア。(狂ほしき心を抑へて)大變面白い書物をお見つけ

になりましたのね、パラモア先生。(二人は驚いて見上

る)何で御座いますの。(業早く身を屈してパラモアより書物を取り上げ、それを見るため足早に卓子に来る。二人は驚いて立上る)まああ。(卓子の上に書物を投げ出し、チャアテリスの側を通つて颯と歸つて来る。チャアテリスに向ひ辱しめるやうに)馬鹿。(この間に二人レセツスより出て来る。パラモアは當惑しグレエスは斷乎として居る)

チャアテリス。(安樂椅子より出て来てジュリアに丈聞えるやうに)

馬鹿。貴女は逐ひ出されるよ、あの女に。

ジュリア。(恐怖にうたる)そんな事あないでせう。それと

も――

バラモア。 どうしたんです。 ミス、クレエヴン。
 チャアテリス。 何でも無い——僕が可けなかつた。 ——拙
 い酒落だつた。 君にもトランフイールド夫人にもど
 うも失敬した。

グレエス。 (断乎と) 少つともあなたが悪いんぢやありません。
 ン。 バラモア先生、お氣の毒ですけれどシルヴィア
 を探して下さいませんか。

バラモア。 (ためらひて) しかし——

グレエス。 どうぞ、ね、行つて下さいました。

バラモア。 (屈して) ようござんす。(頭を下げ階段口より出て行く)

グレエス。 あなたも一所に行つて下さい。 チャアテリス。

ジュリア。 一人ぼつちになつて此人に恥をかゝされるの
 は嫌です、チャアテリスさん。(腕を執り共に行かうとする)

グレエス。 この倶楽部では、二人の婦人の間に悶着があ
 る時に殿方の——殊に目的になつてゐる方の前で、
 おさまりをつけする事を禁じて居ります。 規則をお
 破りになるおつもりでは御座いますまい、ミス、ク
 レエヴン。(ジュリア悲しげに腕を放す。グレエス、チャア
 テリスに向ひ) さあ。 行つて下さい。

チャアテリス。 よろしい、よろしい。(面目なげにバラモアの

後を追ふ)

グレエス。(落着いて断乎と) さあ、何かおつしやる事がありますか。

ジュリア。(突然、愁嘆場よろしくグレエスの足元に跪く) あの方を奪はないで下さいな。ね、そんなに——そんなに酷くしないで、返して下さいな。あなたは御自分のしてゐらしやる事も——あたしたちが昔どんなだつたかつて事も——どんなにあたしが愛して居るかつて事も、皆んな御存じないんです。それに——

グレエス。お立ちなさい。馬鹿な真似をする者ちやありません。誰かがその變な態を見たらどうします。ジュリア。あたしは自分で何して居るんだか知りません。あたしはどんな真似をしたつて關ひません。あんまり惨めなものですもの。あ、聞いては下さらないんですねえ。

グレエス。私を、そんなくだらないことでだまされる男と間違へてらつしやるの。

ジュリア。(立上り、曇った顔附にてグレエスを眺める) ちやあ、奪つておしまひになるお心算ね。

グレエス。あんな真似をなすつた後で、わたしがあなた

を助けるだらうとお思ひなさるの。

ジュリア。(芝居じみた舉動をやめ——感嘆の代りに分別らしく、衝動的のお人好らしく) 昨夜は眞個にわたし、濟まな
い事を致しました。どうぞお免しなすつて下さいま
しな。わたし全く後悔してゐるんですから。まるでき
ちがひだつたんですもの。

グレエス。ちつともきちがひぢやないでせう。昨夜もあ
なたは何處まで遣れるか、ちやんと計畫していらつ
つたんです。あの方が此處に居て私たちの中に立
つてあなたと一所にお芝居をして居るのならわたし

は何とも思ひません。あたしたち二人限りになると
あなたは何か欲しい時の本性を現はして——手には
いるまで赤ン坊のやうに泣いたりわめいたり——
ジュリア。(悪みの色を現はし) そんな事をあの方から教はつ
たんでせう。

グレエス。いゝえ、あなたから、昨夜と今。あなたに、
女つて者がどれつ位みじめな幼稚な者かといふ事を
見せ附けられて、あたしもう、女がつくづく嫌にな
りました。もしあなたが男で、あんな眞似なすつた
なら、二人の方はあなたを絶交して俱樂部から逐ひ

出して下さる。女だと云ふばかりに皆辛抱して同情して親切にして下さる、——あゝ、もしあなたに自尊心が一寸でもおありになつたら、あんまり寛大にされたのでぞつとなさるでせうよ。チャアテリスが女に尊敬を拂はない理が今やつと解りましたよ。

ジュリア。よくもそんな事がお云へになるのねえ。

クレエス。お云へになる。私はあの方を愛して居ますよ。

そして結婚の申込は拒絶しました。

ジュリア。(半疑に、希望をもつて) 拒絶なすつて。

クレエス。えゝ。あなたや、あなたのやうな方々から、

女はどう扱へば好いかつて事を教つて何もかも承知して居る男に、身を委すことは出来ませんか。あなたの方に愛されなくつても辛抱は出来ません。だけど尊敬されなくちやあとても駄目です。両方とも望めなくなつたのは貴女の罪です。さああの方の愛を持つてお出でなさい。何かの足しになれば結構です。馳けつてね、可愛相だと思つて昔に返つて下さいつてお願して御覽なさいよ。

ジュリア。まああなたは嘘つきねえ。お氣の毒様ですが

あの方は貴女に逢ふ前つから、貴女なんてものを考へもしない前つから、わたしを愛して居たので御座いますよ。貴女はわたしが男を引寄せないで此方つからへりくだつて行くと思つてお出なさるの。あなたのようなお多福はそうでせうけれどわたしは違ひますよ。私の一眼で命まで投出す連中が束ねる程あるんです。一寸指を動かせば好いんですからねえ。

グレエス。ちやそうなさい。あの方が来るかどうか。

ジュリア。まあ、一層貴女を殺してしまひたい。何故殺さずに居るんだらう。

グレエス。そうねえ。あなたは難かしい事を易々と、他人の腕で仕遂げやうなんて考へて居らつしやるから。束ねる程澤山な殿方が、招かれさへすればあなたをラヴするつてのはちつとは自慢になりますわねえ。

ジュリア。(悲しげに)あゝ、あなたのやうな冷たいハートや蛇の舌が欲しい。あゝ、わたしにはハートがあるものだからあなたを痛めつけることが出来ないんだ。でも貴女はいくちなしよ。一溜もなく捨てつちまつたぢやありませんか。

グレエス。そうねえ。紛擾するのはあなたの事さ。どう

か甘くおやんなさいまし。(侮るやうに身を隠らして食道口へ行かうとする。時にシルヴァアがカスバアソンとクレエザンの前に立つて入り来る。シルヴァアはクレエスに行き、二人はジュリアへ)

シルヴァア。パラモア様が迎へに來たからやつて來たのよ。老人たちも引張つてつた方が好いらしかつたから、連れて來たの。どんな騒動が起つて。

クレエス。(静かに)何んでも無いのよ。騒動なんかぢやないのよ。

ジュリア。(ヒステリイ風に、よろ／＼してクレエザンに腕を擴

げる)お父さま。

クレエザン。(娘を抱き)まあお前、どうしたんだ。

ジュリア。(涙ながらに)あの方がわたしを俱樂部から追ひ出すつて云ふのよ。わたしたちみんなが辱を受けるわ。あの方にそんな事が出来るの。お父さん。

クレエザン。いや全くこの俱樂部の規則はあんまり奇抜なんで私はちつとも知らない。(クレエスに)失禮だがトランプイイルド夫人。娘の行爲に何か非難を打たれるのかな。

クレエス。は、クレエザン大佐。委員に訴へるつもりで

ございます。

シルヴァア。ジュリアア。何時かやるだらうと思つてたのよ。

(クレエヴァン、途方にくれてカスバアソンを眺める)

カスバアソソ。駄目だ君。此處では父權も役に立たない。

クレエヴァン。失禮だが、トランフイイルド夫人。非難の理

由は何です。

クレエス。唯ミス、クレエヴァンが全く女らしい女で會員

には適しないと云ふので御座います。

ジュリアア。嘘ですよ。私は女らしい女ではありません。

入會した時あなたと同じやうに證明されたんです。

クレエス。チャアテリスさんにでせう、貴女の要求で。

あの方を先程の全然女らしい貴女の舉動の證人に呼

びませう。

クレエヴァン。カスバアソソ。一體戲談なのかい。それとも

夢でも見て居るのかしら。

カスバアソソ。(尊猛に)現實だよ、ダン。醒めて居るのだ。

シルヴァア。(クレエヴァンの左手を取り、それをなつかしげに抱い

て)おなじみのリップ・ヴァン・ウインクル。

クレエヴァン。よろしい、トランフイイルドさん。あなたが

非難をお通しになつて、ジュリアアがこんな亂暴な所

をすぐ出て行く様に希望します。もう云ふ事は無い。

(シルグイア、父の腕をおもちやにしながら、父に向て哄笑する。チャアテリス歸り来る)

チャアテリス。(戸口で)這入つてもようござんすか。

シルグイア。(大佐を放し) え、あなたは證人として必要なの。(チャアテリス入り来る)「女らしい」つて事の難件なのよ。

グレエス。(重々しく、小聲に) 解つて。(ジュリアは二人を懐げに見て、父を離れチャアテリスに近づく。グレエスは聲高く) 委員の前で證明して下さるでせう。

ジュリア。一寸でも男らしい心があるなら私の味方をし
て下さるでせう。

チャアテリス。いや、さうすれば男らしい男だといふ理で
退會さされる。それに僕自身も委員だから、裁判官
と證人を同時に勤める理には行かない。バラモアに
頼まなくちや。すつかり見て居たんだから。

グレエス。バラモア博士は何處にいらつしつて。

チャアテリス。今歸つた。

ジュリア。(急に決心する)バラモア博士はサヴァイル通の
幾番地なの。

チャアテリス。七十九。(ジュリアは素早く階段口から出て行く。

皆驚く。チャアテリスは戸口迄追ふて行くと戸が鼻先へ跳ね返つたので、じつとしてガラス越に後姿を見つめる。シルヴァアはグレエスに馳せ寄る)

シルヴァア。グレエス。追掛けてゐらつしやいよ。先を越されちや駄目よ。きつと皆んなにいじめられたつて哀れつばい話をして、すつかり圓め込んぢまふわ。

クレエヴン。(怒鳴る)シルヴァア姉のことを何て言ひかたするんだ。(グレエスはシルヴァアの手を強く緊めて慰め、冷靜に坐す。シルヴァアはグレエスの椅子の後ろに倚りかゝ

リ三人の間の話を聞いて居る) 實はトランフイイルド夫人。たつた冷バラモア博士が私達をお茶に招待しましたのでね、もし娘があゝの宅へ行つたとすれば、それはたゞ此苦しい幕から身を抜くためその招待を利用したといふだけです。私達も皆そこへ出かけやうとするところなんで。さ、シルヴァア。(カスバアソンと共に行かうとする)

チャアテリス。(當惑して)お待ちなさい。(クレエヴンとカスバアソンとの間に入る) 急がなくても好いぢやありませんか。少しあの男にもゆつくりさせてお遣んなさい。

クレエヴァン。ゆつくり。何故さ。

チャアテリス。(ぶんぶんしながら、とぼける) え、少し休ま

せなくつちや——あんなに忙がしい商賣の人を。一日中に一分だつて自分の時間はありやしない。

クレエヴァン。でもジュリアが一所に居る。

チャアテリス。何あに、關ひません。一人ですもの。それに事件を陳たてる機会もなければならぬ。委員の一人として僕はそれに限ると思ひますね。少し御考へなさいよ、クレエヴァン。半時間猶豫しておやんなさい。

カスパアソン。(嚴格に) どういふ理だ。

チャアテリス。何でもないんですよ。唯少しバラモアの事も考へてね。

カスパアソン。何か目論んだね。クレエヴァン、これは直ぐ行かなくちやいけないよ。(月の執手を握る)

チャアテリス。(宥めて) いや、いや、(強いてクレエヴァンの腕に手を置き) ランチの後で直ぐ急いで歩くのは貴君の肝臓のために好くない。

カスパアソン。肝臓はもう直つてるよ。さあ、クレエヴァン、(戸を開ける)

チャアテリス。(カスバアソンの袖を捕へ) カスバアソン、ど
うかしてますね。バラモアがジュリアに結婚の申込
をしやうと云ふんですよ。是非とも猶豫してやらな
くちや。あの男は僕達のやうに三分間に要點へ来る
男ぢやないんだから。(クレエヴンにふりむき)ねえ。そ
れで今朝話した難問題が解ける。あなたも僕もカス
バアソンも。ねえ。

クレエヴン。君、それが皆の前にさらけ出して云ふべき問
題かい。しやうがないな。君には遠慮つて事がない
のかい。

カスバアソン。(烈しく)あるものか。

チャアテリス。(カスバアソンに向き) まあ、カスバアソン。

ひどくしないで、助けて下さいな。我々がサヴァイ
ル町についた時に、ジュリアがバラモアの婚約の花
嫁になつてるかどうかで、僕の未来もジュリアの未
来もトランフィイルド夫人の未来もクレエヴンの未
来もみんなの未来がきまるんです。時間さへあれば
きつと云ひ出しますよ。あなたは随分ノンセンスな
所もあるけれど、親切で気がきいて又馬鹿に利巧な
所のある人なんですからねえ。一寸助けて下さい。

クレエヴァン。私はカスバアソンに決断をまかせるつもりだ。どんな決断でも不服はない。(カスバアソンは注意深く戸を閉ぢ重々しく考へ込んだ様子をして歸り来る)

カスバアソン。局外者として云はう——即ち道德的責任を
持たないで。

クレエヴァン。無論、それで好いよ。ジヨオ。

カスバアソン。そこで、私はチャアテリスの意見にはちつとも同情は持つてゐないんだが、待つたところで別に害もない様に思へる、——まあ十分位は。(腰を掛く)

チャアテリス。(嬉しげに)あゝ、あなたに限りませよ、厄介なことを片附けるのは。

クレエヴァン。(深く失望して)あゝ。そう云ふ判断なら、約束だからこゝにゐやう。まあ腰でもかけて樂にした方が好いな。(不承無精に坐す)

チャアテリス。(うろつきて)僕は坐れない。いらいらして、それどころぢやない。實はジュリアが僕をすつかり神経過敏にしてしまつたので、その決心のわかる迄は心元ないんです。近頃僕がどんな目にあつてゐるかトランプフィールド夫人がご存じだ。ジュリアは實

に思ひきつた女ですよ。

クレエヴン。(突立つ) さあ、もう、もう、どんなことがあつても、私は直ぐ出掛ける。さあお出で、シルヴァア。カスバアソン、かう云ふ事に就ての君の感じを現はしてバラモアの家の一所に來て貰いたい。(月口に突進する)

チャアテリス。(絶望的に)クレエヴン。娘さんの幸福を無視するんですね。どうぞもう五分。

クレエヴン。五秒だつて待ちません。破廉恥な。(出で去る)
カスバアソン。(月口に歩み寄りつゝチャアテリスの側にて) やり

損ひめ。(クレエヴンに踵いて行く)

シルヴァア。うまく行けばいゝわねえ、お馬鹿さん。(同じく従ふ)

チャアテリス。あゝ、頑固な年寄達だ。(グレエスに) もう、仕方がない。一所に行つて、大佐をなるべく遅れさせるんだ。あなたを放つて行かなきゃならないが。

グレエス。(立上る) そうでもないの。あそこで話して居た時私も招待されたのよ。

チャアテリス。(吃驚して) 來ると云ふんぢやないだらう。

グレエス。参りますとも、逢ふのを恐がつてるなんてあ

の方に思はせるやうなことをするとお思ひになるの。

(チャアテリス深く嘆息して椅子に腰を落す) さあ、馬鹿はおよしなさい。ぐづぐづすると大佐に追いつけませんよ。

チャアテリス。 どうしてかう不運兒に生み附けられたらう。

(失望して立上り) よろしい、來なければならぬのなら來るさ。(腕を出し、女はそれを執る) 時に、僕が行つちやつてからどんな事があつたんだい。

グレエス。 あの女の舉動に就てね、あの人が死ぬ迄忘れられない様なお講義をしてやつたの。

チャアテリス。(讀めるやうに) 其れは好かつた。(手をすらして

腰のまはりに持つて行く) 一つだけキスを——慰めるために。

グレエス。(嬉しげに頬を出して) ばあか。(男、キスする) さ、行きませう。(共に出で行く)

第四幕

サヴァイル町に於けるバラモア宅の居間。 けぼくしくないかなりの家具がバラモアのフロツゴオトやカフスに適應つて居る。 室を窓の所から見ると向ふ側の壁の左手隅に戸があり、右手壁の奥の方にバラモアの診察室に通ずる、緑毛布で覆はれ

た、軽い、音のせぬ区限り戸がある。燵は左手。其近い方の隅には寢椅子が壁と直角に定着して居る右手の壁は縁布の戸の前方が書物棚で占領され、戸の奥は解剖準備の小さい室で、レムプラントの解剖室の畫の寫真が額縁に入れて掛けられた。前面稍右手寄りに茶卓子。
パラモアは脚輪の附いた圓背の椅子に掛け茶を注ぎ居る。ジュリア燵を背にして對坐する。男は興奮し、女は悄然として居る。

パラモア。(一杯に注いだコップを女に渡し) さあどうぞ。お茶を立てるのは私の少しばかりの十八番の一つです。
お茶菓子は。

ジュリア。いゝえ澤山。甘いものは嫌なんで御座います。

(コップを飲まずに下に置く)

パラモア。茶はいけませんか。

ジュリア。いえ、大變御結構で御座います。

パラモア。どうも私は不愛想でいけません。實はあんまり専門的なんですね。診察だけは振つたものです。何か眞面目な問題でもお持ちだと好いと思ふ位ですよ。さうすりやあこの智慧や同情が少しは足しになりますかねえ。これちや唯あなたを讚めたり、此處に居て下さるので大變嬉しく思つたりする外仕様が

ありません。

ジュリア。(苦々しく)そして甘やかして、いろいろうれしがらせを仰る、といふのでせう。まあ何故牛乳の小皿をお出しになりませんの。

バラモア。(驚きて)何故です。

ジュリア。まるで私をペルシヤ猫とでも思つてゐらつしやるんですもの。

バラモア。(強く告めて)ミス、クレエ——

ジュリア。(遮る)まあ、反對なさるには及びませんわ。そんなことは慣れつこになつてゐますの。あたしの

引力はそれ位なものなんですもの。(反語的に)でも大變嬉しいんですの、そうされると。

バラモア。皮肉ですなあ。ミス、クレエヴン。街で通りすがりに一眼見ると大抵の男がラヴするといふ貴女おやありませんか。倶楽部でも男連の顔を見れば今迄貴女が其處にゐらしたかどうかすぐ解りますよ。

ジュリア。(烈しく顔をしかめ)あゝ、私は其顔附が大嫌です。わたしは生れてから誰一人だつてかまつて呉れたことはないんですもの。

バラモア。それは嘘です。お父様や、それから貴女に嫌

はれて居ながら狂人の様になつて貴女をラヴして居るチャアテリスなんかはさうかも知れないけれど、私にとつては嘘です。

ジュリア。(驚いて)チャアテリスの事を誰からお聞きになりました。

パラモア。なに、あの男が自分で云ひました。

ジュリア。(深酷な自信ある様子)あの方のかまつてるのは世界中でたつた一人限です。それは自分つて者。全く我儘の塊なんです。實生活の一時間だつて、この——(咽んで聲が出ない。狂熱的に立上る)殿方つて者は

皆んなさうなんです。父でさへ私をおもちやにして居ます。(爐に行き、男に背を向けて立つ)

パラモア。(意氣地なく従ふ)私はそんな事を云はれる筈はありませんよ。實際ありませんよ。

ジュリア。(責める調子)ぢや何故陰でチャアテリスと、私の事をお話なさいますの。

パラモア。なにも悪口なんか云ひはしませんよ。私の前では誰にだつてそんな事は云はせません。私たちは心の底を打ちあけてその話をしたのです。

ジュリア。あの人の心。まあ。(寝椅子に掛けて顔を襲ふ)

バラモア。(悲しげに)ミス、クレエヴン。それでもあなた
はチャアテリスをラヴするでせうねえ。

ジュリア。(すぐ頭をあげ)あの方がそんな事を云つたらそ
れは嘘です。一寸でも私が気があつたやうな噂をお
聞きになつたら反對して下さい。嘘なんですもの。

バラモア。(素早く歩み寄り)ミス、クレエヴン。では御承
諾下さいませね。

ジュリア。(會話の興味を失ひ、當惑げに火を見つめる)何で御
座いますつて。

バラモア。(性急に)今申しませう。あなたがチャアテリスに

ラヴしてゐらつしやるといふ評判を語でなくつて—
—語でなんかもう利目がありませんからね—私と
の結婚で打消して下さい。(熱心に)ねえ。私が貴女に
引つけられるのは美人だからつてばかりぢやありま
せん。(ジュリアは興味を起して、さと見上げる)私は外に
だつて美人を知つて居ます。私が引きつけられたの
はあなたの心あなたの眞誠、あなたの本質、(ジュリ
ア、立上り新希望を以て息も吐かずに見つめる)これ迄周
圍の人に了解せられなかつたので未だ充分發達して
居ないあなたの性格の偉大な天質です。

ジュリア。(深く男を見つめ、思はずなほ嘲笑的の疑惑を起す) 本
當にそうお考へなさいませうの。

バラモア。私は直覺しました。私はこれまで全くの一人
ぼつちだつたからそれで貴女が欲しいのです、ジュ
リア。さう云ふわけで私はあなたも全くの一人ぼつ
ちだと豫想して居ました。

ジュリア。(芝居じみた熱情を以て) そうなんで御座います。
ほんとに私も全くの一人ぼつち。

バラモア。(おづくと近づく) 私はおあなたがあれば一人ぼつ
ちぢやない。あなたは。私が居れば――

ジュリア。あなたが。(素早く茶卓子を楯にとり手の届かぬ所
に行く) いえ、いえ、あたしは――(當惑げに急に語をき
り、不安らしくあたりを見廻す) あゝ、どうすれば好いん
でせう。あなたはあたしを買破つてゐらつしやるん
です。(坐す)

バラモア。私はあなた自身よりも一層あなたを信じて居
ます。あなたの性質は自分で考へてゐらつしやるよ
りもずつと豊富です。

ジュリア。(疑はしげに) あなたはほんたうに私が、皆の云
ふやうな淺薄で嫉み深い悪魔見たいな女ではないと

お思ひなさいますの。

バラモア。私は自分の幸福をあなたの手に渡さうとしてゐるのです。これで私の心は解つたでせう。

ジュリア。えゝ。私を本當に思つて下さるのねえ。(男は

熱心に近寄る。女は仰々しい厭忌の念を現はし男を打つ様な手附をして立上る)いえ、いえ、いえ。出来ないんです。

駄目ですよ。(戸に行く)

バラモア。(一心に後を見送る)チャアテリスのためですね。

ジュリア。(止りて振向き)まあ、さうお考へなさるの。(歸り來る)まあ、ね。あたしが承知したら私に觸らない

——二人の新規な關係に慣れて來るまで猶豫する、つて約束して下さる。

バラモア。忠實に約束します。決して無理はしません。

ジュリア。ちやあ——ちやあ——承知しました、私は約

束——(男は殆んど喜びの叫聲を出さうとする。女はそれを制して)もうその話は止ませう。もう考へないこと。

(卓子の傍の元の席に歸る)もつとお茶を頂戴な。(男も元の席へ急ぐ。男が傍を通る時女は左手を男の腕に置き)親切にして下さいな。バアシー。それ丈がわたしの望なのよ。

パラモア。(仰天して)私をバアシイつて呼びましたね。占めたぞ。(チャアテリスとクレエヴン入り来る。パラモアにこここしながら急いで迎へる)よくゐらしつて下さいました、クレエヴン大佐。よく来て下さつた。チャアテリス。どうかお掛け下さつて。(大佐は寝椅子の端に坐す)ほかの方々は。

チャアテリス。シルヴィアがカスバアソンを引張つてからめるを買ひにバアリントン・アアケエドへ入つちまつた。カスバアソンはからめるを食ふのを奨励してゐるのでね。あれが女らしい趣味だそうだ。それに自分

も好きなのさ。直ぐ来るだらう。(室を横切つて隣の小房に行きレムアラントの寫眞を見る態を裝ふ。成るべくジュリアを遠ざかるやうに)クレエヴン。そうだ。それからチャアテリスがね、コオク街とサヴァイル通との間に、どつかコンドイユウト町邊で近道があると云つて聞かないんだ。そんな馬鹿な話があるものぢやない。それから私のコオトが檻樓になり掛けてゐるからプールの店で一つ注文しろと云ふのだ。パラモア、わしのコオトはぼろぼろかい。

バラモア。いゝえ、別に。

クレエヴァン。そうだらうとも。それからエヂプト戦争に就て私を議論に引き込まうとするのだ。あんな馬鹿な真似をしなければ十五分は早く来られたのだ。

チャアテリス。(なほレムブランドを見て居る)バラモア。君の邪魔をさせまいと思つて全力を盡したんだよ。

バラモア。(有難さうに)あゝ、丁度好い時に来て下さつた。大佐。少し特別にお話したい事があります。

クレエヴァン。(驚いて飛上る)秘密にだよ。ねえ、實際これは秘密でなくちやいけない。

バラモア。(驚いて)勿論、私は診察室で、と云はうと思つて居ました。あすこは誰も居ません。ちよつと失敬します。ミス、クレエヴァン。私が来るまでチャアテリスがお相手をして呉れませう。(緑布戸への道を案内する)

チャアテリス。(落膽して)おい、君。皆が来る迄待つた方が好かないか。

バラモア。(嬉しげに)もう延す必要はないんですよ、君。

(チャアテリスの手を握り締め)さあ、大佐。

クレエヴァン。はい、はい。(兩人診察室へはいる。ジュリア頭を

めぐらし豪然とチャアテリスを凝視する。神経が變な風になつて、男は一時茫然として居る。女は突然立上る。男は驚いて急ぎ卓子と書棚の間に来る。女が其の方へ行つて卓子のうしろまでくると男は又逃げて卓子の前面へ来る)

チャアテリス。(いらいらして)いけない。ジュリア。地の利を悪用するのはお止しよ。此處ぢや全くあなたの手の中にあるんだから、一度位は親切を見せて、芝居を止しておくれよ。

ジュリア。(輕蔑的に)私が捕へに行くとでも思つて。

チャアテリス。いや、無論そうぢやないだらう。(女は卓子

のうしろから進んで来る。男はその前面を退く。女は非常な嘲笑を以て男を眺め、寢椅子に馳せ寄つて堂々と座を占める。ほつと嘆息をして男はパラモアの椅子に坐す)

ジュリア。あつしやいよ。お話ししたい事があるから。

チャアテリス。えゝ。(椅子を二三寸轉がす)

ジュリア。あつしやいつたら。まさか遠くから怒鳴つてお話しも出来ないぢやありませんか。私が恐いの。

チャアテリス。恐いともさ。(椅子を除々とコオチの端まで動かして行く。餘程疑惑を懷きたる様子)

ジュリア。(勿體ぶつた傲慢な態度)あの女がね、勝利をむざ

むざと捨て、よ。そして貴君を返したのよ。聞いて。

チャアテリス。(説服するやうな調子で囁く) 貴女にもそんな犠

牲が拂へるかい。拂へるなら僕を捨て、おくれな。

ジュリア。犠牲ですつて。おや私が死ぬ程結婚したがつ

てるとお思ひなさるの。

チャアテリス。結構なことを考へてゐらつしやいましたん

でせうよ。

ジュリア。畜生。

チャアテリス。(嘆息する) 僕は白状するがね、ジュリア。こ

れでも紳士といふものよりはすぐれてるか、劣つて

るかどつちかの代物なんだ。あなたのお蔭で一度はどつちだらうと疑つて見た。

ジュリア。あらまあ。わたしはそんな事は云はなくてよ。

紳士らしい行が出来なきや、いつそ、あのあなたを

捨てた女との燃でもお戻しなさい。あんな冷血な卑

怯な物が女つて云へるかどうか知らないけれど。(威

厳を正して立上る。男は椅子を卓子へ突き戻す) もうあな

たがすつかり解つてよ。レオナルド・チャアテリス。

虚偽やら、ちいぼけな毒心やら、残酷やら虚榮心や

ら、皆、解つちやつたの。貴君がけちけちして居た

位置はもつと偉い人が手に入れましたよ。

チャアテリス。(飛上つて熱心のあまり喘ぎながら女に近づく) 何だつて。被仰い。あなたは承——

ジュリア。バラモア博士と婚約しました。

チャアテリス。(有頂天になり) あゝジュリア。(抱かうとする)

ジュリア。(退く、——男は手を捕へて握る) 何をするの。気が違つて。バラモア博士を呼びますよ。

チャアテリス。誰でもお呼びよ。——倫敦中の誰でも好い。

さあもう荒々しくする必要もなければ——身を護る必要もない。——あなたを恐れて居る必要もない。

どんなにかうなるのが待遠しかつたらう。さあこれで僕があなたに結婚したくもラヴしたくもない事が解つたらう。皆バラモアに委す。たゞ利害關係なしに親しきジュリアの(手にキスする)美しいジュリアの(他の手にキスする)幸福を見て喜んで居たいんだ。(女は手を振り放し、丁度昨夜カスバアソン宅でした様に、男を打たんとしてふり上げる) もう威かさなくても好い。その素的に可愛い手が恐いものか。

ジュリア。あんなに私を辱しめたり苦しめたりした後でまあよくもそんな事が。

チャアテリス。何あに、あなたには僕が解らなかつたんだ。これからだつて解りつこはない。解剖家はとうとう実験に成功した。

ジュリア。(熱心に)解剖家はあなたよ——もつともつと残酷な、蕩らな解剖家よ。

チャアテリス。そうさ。だが僕はこの実験であの男よりはずつと多くのことを覺えたよ。犠牲になつた者も僕同様に賢くなつた筈だ。こゝが僕の道德の優越な所なんだ。

ジュリア。(再びコオチの上に悲しげな嘲笑を浮べて坐す)え、

え、私はもう実験の材料にはなりませんよ。犠牲が欲しければグレエスの所へゐらつしやい。一寸手強いでせうよ。

チャアテリス。(側に掛けて、責める調子に)あなたから逃げるために仕方なくあの女へ結婚を申込んだのさ。もし承諾されやうものなら、僕は今頃何處に居る事か。

ジュリア。パラモアの申込を承諾した私は何處に居ますかねえ。

チャアテリス。でもそうなればグレエスは随分不幸だつたらう。(ジュリア嘲笑)だがそう云へばあなたもパラモ

アを不幸にするだらう。しかし拒絶された所で定めし失望するだらうよ。可愛相に。

ジュリア。(一時又赫となる) あなたよりは好い人間ですよ。

チャアテリス。(謙遜したやうに) 御尤だ。

ジュリア。でも不幸にしたつて云ふのはどう云ふ意味。

あの方には私これで充分好かないの。

チャアテリス。(あいまいに) さう、その充分好いつて語の意味によつて違ふさ。

ジュリア。(熱心に) もしあなたにそんな気があつたら私を好くして下すつたかも知れないのよ。あなたは全く

私を支配する力を持つて居たわ。あなたの手に掛ると私はまるで小供だつたの。知つてたわねえ、あなたも。

チャアテリス。(快活に満足の意を表はす) あゝ、知つてたとも。

何時でもあなたが嫉妬で引搔くやうな痲癢を起した時は、いつまでもじつと待つて甘やかしてさへ居れば、きつと目出度収まると安心してゐることが出来た。あなたが當り散らして、嫉妬の對象に出委せの悪口を吐き掛け、腹の癒えるまで僕を侮辱して二時間経てば必ず反動が来る。そしてあなたは穩かな

恍惚とした心持に静まつて行つて天使の様に好い寛大な女になるのだ。そう、あなたにはそう云ふ好い所がある。そう云ふ時に僕があなたの體に潜んで居る可愛らしさを味つて居るのだ、とあなたは思つてゐたかもしれないが、しかし、貴女も僕のを許された以上に味つて居た。

ジュリア。そう云つてしまへば私に好い所はないぢやありませんか。私はまるで不徳な價值のない女になるでせう。

チャアテリス。そう、もしあなたが外の女を判断する様に

して判断すればね。コンベンショナルな立場からは、全くジュリア、あなたを辯護すべき事は何にもない。だから僕は嘗てあなたを愛した事を思ひ出す毎に、自尊心を救ふためほかの立場を求めなければならなくなる。僕は何をあなたから學んだらう——僕によつて何の得る所もなかつたあなたから。僕はあなたを馬鹿にして居たが、あなたは僕に智慧を與へて呉れた。僕はあなたをプロオクンハートにしたが、貴女は僕に愉快を與へて呉れた。僕はあなたに女らしいといふことを呪はしめたが、あなたは僕の男らし

い所を現はして呉れた。未來永劫ジュリアの名に祝福あれ。(眞實の情熱を以て手を取りキスしやうとする)

ジュリア。(不愉快氣に手をふり放し)そんな汚はしい冷笑は止して下さい。

チャアテリス。(笑ひながら天に訴へる)あゝ、あれを汚はしい冷笑だと云ひます。よろしい、よろしい、もうあんな風にして話することは止すよ。今云つた事はね、あなたがきれいな女で誰でもラヴするつて事だよ。

ジュリア。そんな事をおつしやるな。大嫌ですよ。何だ

か獸だつて云はれるやうな氣がします。

チャアテリス。ふむ、綺麗な獸は随分不思議なものだ。あんまり獸の悪口は云はないことにしやうよ、ジュリア。

ジュリア。あなたは本當に私をそう思つてゐらつしやるのよ。

チャアテリス。そりやねえ、僕に貴女の品性を讃めて呉れつたつて駄目さ。(女は振り返りて烈しく男を見る。男は理解したらしく飛上つて身を引く。女は立上り、除々と注意深くこれを追ふ)

ジュリア。(思案しながら)この品性のない墮落した動物に
あなたは溺れて居たんですよ。

チャアテリス。(退きつゝ)お止しよ、ジュリア。パラモアに
對する新らしい責任を忘れちゃいけない。

ジュリア。(室の中央にて追ひつき)パラモアはあなたの知つ
たことぢやないわ。(男の襟を両手で握り、しつかと男を
凝視する)あゝ、あなたが利巧さうな顔をして話しす
る相手が皆私の様にあなたを知つて居たらばねえ。
折々はあなたを思つた事があつた自分がおかしくな
るわ。

チャアテリス。(にこ／＼して)折々つ限りかい。

ジュリア。詐僞。騙り。ちつぽけな石膏の聖人。(男愉快
げな顔をする)あゝ。(半ばは怒り、半ばは饜しさの發作で
男をゆすぶる。虎の雌が自分の仔に咆哮しつゝ、戯れ掛るやう
に。此時クレエザンとパラモア診察室より入り來り此光景に
電撃される)

クレエザン。(極度に侮辱されて叫ぶ)ジュリア。(ジュリアはチ
ャアテリスを放し、輕蔑の色を浮べて其處に突立つ。兩人進
み來てクレエザンは左に、パラモアは右に立つ)
パラモア。どうしたんです。

チャアテリス。何でもないよ、何でもないよ。こんな事に
は直ぐ慣れて来るよ、君。

クレエヴン。實際、ジュリア、あゝいふ舉動は唯事でない。

パラモアに對して不眞面目だ。

ジュリア。(冷かに)パラモア博士が反對なさるのなら婚約

をお破りになれば好いでせう。(パラモアに)どうぞ、

ご躊躇なさないやうに。

パラモア。(奇怪げに又心配げに女を見やり)婚約を破れと被

仰るんですか。

チャアテリス。(吃驚して)馬鹿な。そんなにはたばたとやら

なくとも好い。僕がわるかつたんです。ミス、クレ
エヴンをいぢめて——侮辱したんです。みんなわる
かつた、そんなにも何もかも、ひつくり返すには及ば
ない。

クレエヴン。これは實に迷惑だ。君がジュリアを侮辱した

とは信じられない。無論君はあれを苦しめたらう——

君は誰だつて苦しめる。しかし實際君が——侮辱

——ねえ、どう云ふ意味なのだ。

パラモア。(熱心に)ミス、クレエヴン、私は全心を籠めて

御願ひします。何卒打開けて下さい。一體チャテリ

スとの間はどうか云ふのです。

ジュリア。 チャルテリスにお尋ねなさい。(皆に背を向けて
爐の所へ行く)

チャアテリス。 よろしい。白状しませう。僕はミス、クレ
エヴンを愛して居ます。常に愛して居ました。そし
て知己になつて以來常住語で以ていじめて居ました。
それが役に立たないで僕はすつかりさげすまれて居
ます。今も敵手の幸福が癪に障つたものだから一寸
汚らしい冷笑の語を吐いたのです。それであの方が
——ええ、あの方が一寸僕を小突いたわけです。

バラモア。(勇ましく)僕の成功を助力して下さつた段は決
して忘れません。(ジュリアはさつと振返る。顔には激怒
の痙攣起る)

チャアテリス。 しつ。何卒それ丈は止してくれ給へ。

クレエヴン。これは、今朝カスバアソンと二人で聞いた話
とは大分違ふね。失敬ぢやがこの方が本當らしい。

さあ、今朝は私たちをだましたんだらう。

チャアテリス。 ジュリアにお聞きなさい。(兩人ジュリアの方
に向く。チャアテリスは苦々しく正面を見つめる)

ジュリア。 全く本當なんで御座います。あの方は私にラ

グして私をいじめたんです。私は輕蔑してゐます。
 クレエヴン。そんなに云ふものぢやない、ジュリア。それ
 は不親切といふものだ。誰だつてラヴで苦しんでる
 時は少しどうかなくて居るからね。(チャアテリスに)さ
 てチャアテリス、私が若かつた時分にカスバアソン
 と二人で同じ女を戀した事がある。女はカスバアソ
 ンを選んだので、私は敗北した。私は隠しはしない。
 然し義務をちやんと心得て居て、それをやり果した。
 私は女を捨ててカスバアソンに喜を云つてやつたの
 だ。今朝久し振で話をし合つたが、其後はその事の

ために一層私を敬愛したさうだ。(強く)さて、チャア
 テリス、君とバラモアとは今日丁度三十五年前の七
 月のある晩私とカスバアソンの間に起つたと同じ位
 置にあるのだ。君はどう處置するつもりだね。

ジュリア。(ぶりくして) どう處置するつもりつて、まあ。
 ほんたうにお父さま、あんまりだわ。カスバアソン
 夫人があなたをお嫌ひになつたから、その方を思ひ
 きるのを道徳的にお考へになつたのは、丁度バアシ
 イに酒を禁じられて禁酒家になるのを道徳的にお考
 へになつたと同じで、そりやああなたが大變お偉か

つたのかも知れないわ。でも此方は私に對して道德的になる筈がないんですもの。私は拒絶したけれど、もしそれが氣に喰はなければこの方はきつと——

チャアテリス。きつと思ひきますよ。確かに。クレエヴン、嘘ちやありません。捨てますよ。(無頓着に群を離れ、手をポケットに入れた儘書棚にもたれる)

クレエヴン。(不機嫌に)ジュリア。それが父に對する道か。

私は小言を云ひたくはないが今の語は確かに穩かでない。

ジュリア。(涙に咽び、大きな椅子に身を投げ掛けて)あゝ世間

に一人でも私に同情して下さいさる——私を汚はしいと思はない人はないのか知ら。(クレエヴンとバラモア非常に當惑して急ぎ側に寄る)

クレエヴン。(後悔して)好い兒だ、私は少しも——

ジュリア。私は二人の契約で——ちやうど市場の奴隷見たいに一人の手から他人の手へ渡つて、自分の辯解には一言も云へないんですか。

クレエヴン。しかし、お前——

ジュリア。あゝもう皆行つて下さい。放つといて貰へば好いんです。私は——あゝ——(熱涙の情を縦に働かせる)

バラモア。(クレエヴンを責めて) 大佐、あなたがあんまり酷くおやりになるから。

クレエヴン。然しそんなつもりでは無かつた。何にも云ひはしない。チャアテリス、私は厳しかつたかねえ。

チャアテリス。あなたは娘達の謀反つて事を忘れてゐらつしやる。あなたは自分の娘でない一人前の女に對してはあゝ云ふ風にはしないでせう。

クレエヴン。では私の娘を他人の娘と同じ様に扱ふが好いと云ふのだね。

バラモア。確かにそうです、大佐。

クレエヴン。そんな馬鹿な事が。

バラモア。そんな風におつしやるなら、もう申上る事はありません。(威厳を傷けられて、室を横ぎり、チャアテリスの傍に書棚にもたれて立つ)

ジュリア。(咽ぶ) お父さま。

クレエヴン。(慰めるやうに振りむく) うむ、どうした。

ジュリア。(涙ながらに父を見上げ手にキスする) あの方たちはどうでも好う御座んす。お父様はあんなつもりでは無かつたんですねえ。

クレエヴン。そうだともし。さあもうお泣きでない。

バラモア。(愉快げにジュリアを見て、チャアテリスに) 實に美人ですわね。

チャアテリス。(手を高くあげ) 健在なれ。バラモア。(書棚を

離れ、コオチの火に最も遠い端に掛ける。此間にシルヴァ

到着)

シルヴァア。(ジュリアを凝視し) また泣いてるの。まあ女ら

しい女ねえ。

クレエヴン。姉さんを苛める奴があるか、シルヴァア。辛

抱が出来ないから泣くのだ。

シルヴァア。お父さま、讚めて居るんぢやありませんか。

宅の駄々つ子を世間が皆知つてる理もないでせう。

ジュリア。直ぐ耳の上を見舞つて上げるよ、馬鹿。

クレエヴン。まあ、まあ、まあ、お前達は實際まあどうも、

さあジュリア。トランプイールド夫人に見られぬや

うにハンカチをおしまひよ。ジョオと一所だから。

ジュリア。(立上る) またあの女が。

シルヴァア。また一騒動だ。おやりよ、ジュリア。

クレエヴン。黙つといで、シルヴァア。(ジュリアに向いて命

令的に) さあお聞き、ジュリア。

チャアテリス。やあ、父の謀反だ。

クレエヴァン。だまつてゐたまへ、チャアテリス。(ジュリアに返事をさせぬやうにして) 喧嘩の時にどう云ふ行動をするかによつて人の品格は解るものだ。平和な時なら誰だつて立派に行動する事が出来る。今朝あの不公正な倶楽部でお前は女らしい女でないと云つたが、それはまあそれで好い。トランフィイルド夫人が入つて来た時に、もし淑女らしく振舞はない心算なら、是非紳士らしく行動しなければならぬ。でなければ、こんなにお前を愛して居るけれども、殺してしまふよ。お前が男子なら吃度そうするのだから。

バラモア。(とがめて) 大佐——
 クレエヴァン。(遮り) 馬鹿なまねをしたまふな、バラモア。
 ジュリア。(涙ながらに詫びる) きつと、お父さま——
 クレエヴァン。啜り泣きおやめ。これはお父さんとして云つて居るのぢやない。指揮官なのだ。
 シルヴァア。まあ、ヴァクトリア勳章。(クレエヴァン振向いて鋭く娘を見る。娘は素早くチャアテリスの後に馳せ寄つて、直ぐ、男と肩を並べ背を向き合ふやうに腰掛ける。カスバアソンとグレエス到着、グレエスは父が皆と一所になるまで戸口に止る)

クレエヴン。やあ、来たね。さあ。バラモア、報告したまへ。

バラモア。トランスファイイルド夫人、——カスバアソン、

これが私の未来の妻です。

カスバアソン。(進みてバラモアと握手し)お目出たう。(バラモ

アはクレエスと握手しに行く)ミス、クレエヴン、クレエスの祝詞も私と同じに受けて下さるでせうね。

クレエヴン。無論さ。(命令的に)さ、ジュリア。(ジュリア遅々として立上る)

カスバアソン。さあ、クレエス。(クレエスをジュリアの右に連

れて来る。自分は爐の敷物の上に火を後にして二人を見まもりつゝ立つて居る。大佐は他方から二人を見て居る)

クレエス。(低くジュリアに丈聞えるやうに)愈あの人がなく

てもすむつて事を見せてやりましたのね。では私の言つたことはみんな取消し。握手して下さる。(ジュ

リア顔をそむけて苦しげに手を出す)みんなは、幸福な終局だと思つて居るのねえ、ジュリア、——この男たちは——私たちの殿方は。(二人は沈黙し手を握つて立つ)

シルヴァア。(コオチの向ふからチャアテリスに寄りかゝり他人に聞えぬやう)本當にあなたは捨てられたの。(男は首肯

く。男の顔を疑はしげに見て）私はあなたが捨てたのか
と思つて居たわ。

カスバアソン。だがバラモア。この事に就て君はチャアテ
リスから皮肉を浴せられる憂はない。あの男も同じ
状態にある。グレエスと婚約しました。

ジュリア。（グレエスの手を落し、怒りの餘りに息を飲んで、し
かし除かに）また。

チャアテリス。（急いで立上る）驚いちやいけない。すつかり
破却しました。

シルヴァア。（憤慨して立上る）何ですつて。グレエスも捨て

たの。まあ、恥だわ。（怒つて室の他の側に行く）

チャアテリス。（後に蹤いて行つて、慰めるやうに肩に手を置く）
向ふで結婚したくないんだよ。小僧さん。——それ
は（他の連中に向ひ）トランフイイルド夫人が再び決意
を翻したのでなければ。

グレエス。いゝえ、私たちは何時までも親友で居たいと
思ひます。然しどんな事があつてもあなたと結婚は
しません。（爐傍の椅子をとつて平氣で腰を下ろす）

ジュリア。あゝ。（腰掛けて安心の溜息を吐く）

シルヴァア。（チャアテリスを慰めて）可愛相に。レオナアド。

チャアテリス。あゝ、戀を漁る人の罰さ。僕は一生戀を漁つて居なきやならないんだ。團欒もなければ、爐傍もない。可愛い兒もない。カスバアソンの主義にもとづくやうなものは何にもない。誰も僕には結婚してくれない、——あなたでなくちや、シルヴァーね。

シルヴァー。そんな事を知つてゐるから厭、チャアテリス。

チャアテリス。(皆に)これです。

クレエヴン。(チャアテリスとシルヴァーの中間に来て)まあ實際、君、そんな事を戯談に云ふものぢやないよ、け

つして云つて呉れ給ふな。チャアテリス。

カスバアソン。(爐の敷物の上にて)神聖な事も、戯談の種にするより外に用途がないと思つて居る。これが新しい階級だ。有難い事には私たちは古い階級に屬して居るよ。ダン。

チャアテリス。象徴的な云ひ方はお止しなさいよ。

カスバアソン。(怒りて)象徴的。それはイブセニズムに對する攻撃ぢやないか。どう云ふんだ。

チャアテリス。古い階級の象徴。古い階級を代表するなどと考へちやいけません。古い階級なんて物は決して

なかつた。

クレエヴン。その點では私は明白に君に反對してジョオの味方をする。私の若い時分には君のやうな行動をするよりカルタで誤魔化しをやる方が未だ好かつた。私も古い階級だ。

チャアテリス。あなたはだんだん老ぼれて来る、それを何時ものやうに利用しやうと思つて居る。

クレエヴン。まあ、まあ、チャアテリス、癢に障へないでくれたまへ。(急ににこにことして) あゝ、どうもカルタの事は云はなければよかつた。撤回します。(手を差

出す)

チャアテリス。(手を執り)なあに、ちつとも。怒つた理ぢやありません。しかし、(誰か聞いて居はしないかと思ひ) た上で、傍白する)まあ考へて御覽なさい——敵手の幸福な有様が——

クレエヴン。(聲高く、斷乎と)チャアテリス。さあ男らしくやらなくちやいけない。君の義務は明白だ。(カスバアソンに)ね、いゝだらう。

カスバアソン。(確乎と)いゝとも。

クレエヴン。(チャアテリスに)ジュリアの所へ行つて祝詞を

陳べたまへ。紳士らしく、にこにことして。

チャアテリス。やりませう、大佐。内心の葛藤はちらつとも出しやしません。

クレエヴン。ジュリア、チャアテリスは未だお祝ひをしな
いから、今其處へ行くよ。(ジュリア立上つて、恐ろしい
眼附でチャアテリスを見る)

シルヴァイア。(素早く、歩き出さんとするチャアテリスの後から囁
く)氣をお附なさいよ。打つから。私よく知つてるわ。

(チャアテリスは立留つて、位置を考へながら注意深くジュリ
アを見る。兩人暫らく堅くなつて見合ふ。グレエスやんはり

と立上りジュリアに近づく)

チャアテリス。(肩越しにシルヴァイアに囁く)何あに關はないで
やつて見やう。(堂々とジュリアの方に進む)ジュリア。

(手を出す)

ジュリア。(手を執りながら、がっかりとして)あなたが正しい
のよ。私はろくでなしです。

チャアテリス。(凱歌をあぐるやうに、愉快らしく反對する)まあ、
何故さ。

ジュリア。あなたを殺す程の勇氣がないから。

グレエス。(ジュリアが殆んど氣絶して倒れかゝるを男より放し

近現代本叢書

て胸に抱き) まあ、いけませんよ。女^{をんな}たらしに威張^{おどろ}らせ
せるのは。(チャアテリス平氣で面白さうに笑ひながら首を
振る。あとの人々は心配げにジュリアを見る。初めて烈しい
悲哀の存在を覺えてやゝ恐怖の氣起る)

戀をあさる人 終

大正二年八月十日印刷
大正二年八月十七日發行

定價金四拾錢

近現代本叢書 第七編
戀をあさる人

著譯者 和辻哲郎

東京市神田區南神保町拾四番地

發行者 鶴岡五郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷者 荻原勝次郎

東京市神田區南神保町十四番地

發行所

現代

振替口座東京二三八三三番
電話本局一四二五番



東京市小石川區久堅町一〇八番地
博文館印刷所發行

近代脚本書叢

袖珍本表裝 每册三頁 定價 四拾錢 送料 四錢 原寫眞者及舞臺入葉數

第一篇

シユニツレル作 森鷗外譯
戀愛三昧

好評再版發賣

第二篇

シヨオ作 楠山正雄譯
運命の人

好評再版發賣

第三篇

メエテルリソク作 島村抱月譯
ペレアスとメリサンド

新刊發賣

第四篇

ワイルド作 若月紫蘭譯
サロメ

新刊發賣

第五篇

イブセン作 草野榮二譯
海の夫人

新刊發賣

近代脚本書叢

袖珍本表裝 每册三頁 定價 四拾錢 送料 四錢 原寫眞者及舞臺入葉數

第六篇

ストリンダベルク作 島村民藏譯
伯爵令嬢

新刊發賣

第七篇

ハウプトマン作 小野秀雄譯
馭者ヘンシエル

新刊發賣

第八篇

シヨオ作 和辻哲郎譯
戀をあさる人

新刊發賣

第九篇

トルストイ作 佐藤綠葉譯
生ける死骸

近刊

第十篇

チエホフ作 徳田秋江譯
鷗

近刊

近代脚本書叢

補冊每 珍凡三 本百三 裝頁百 定價 四拾錢 送料 原函 作者寫 及者眞 舞及業 入業

第一篇

メエテルリンク作 小山内薫譯
群盲 近刊

第二篇

ガルスワアツイ作 市川又彦譯
鳩 近刊

第三篇

メエテルリンク作 若月紫蘭譯
青い鳥 近刊

第四篇

チエホフ作 秦豊吉譯
三人姉妹 近刊

其他ホフマンエレクトラトハウプマンの
前ストリン父等續刊

274
367

終

